様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０３１４６

研究課題名（和文）東アジア出墨書陶磁器の総合的分類と分析

研究課題名（英文）Comprehensive classification and analysis of ceramics written by ink discovered in East Asia

研究代表者
石黒　ひさ子（ISHIGURO, Hisako）

明治大学・研究・知財戦略機構（駿河台）・研究推進員

研究者番号：３０４４５８６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、史料としての活用することを目指し、墨書陶磁器の資料集成とそのデータベース化を目的とした。墨書陶磁器は主に中国産の陶磁器に墨書されているため、中国では内蒙古自治区、江蘇省、河南省、広東省等での現地調査、また香港、韓国、台湾澎湖島でも資料実見調査を行った。日本国内でも尼崎、奄美諸島、平泉、長崎、福岡、京都等多数の遺跡に赴き墨書陶磁器を調査した。
　この現地調査をベースとして、国内外の学会で墨書陶磁器に関わる研究発表を実施し、本研究期間中に墨書陶磁器に関連する学術論文6篇を発表した。データベースについては「南海Ｉ号」墨書陶磁器データベースを作成、『中国出土墨書陶磁器集成』を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　墨書陶磁器は日本においては12～13世紀の中国との貿易や海域交流の実態を示すものとして重要性が理解されているが、中国において陶磁器に墨書するという習慣が宋代を中心に広範囲に見られることもあり、中国国内ではその重要性に着目する研究者はまだ多くない。本研究期間中、中国内の多くの研究機関を訪問し、本研究の墨書陶磁器研究は高く評価され、中国での論文発表や大学講座の機会も得た。
　また本研究で作成した墨書陶磁器データベースはインターネット上でも閲覧可能となっているが、本研究の成果を広く発信するために冊子体の集成も刊行した。このデータベース及び刊行物は今後の墨書陶磁器研究の基礎となるものと評価されている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to collect the data of ceramics written by ink and make a database, and use it as a historical material.Since these ceramics written by ink is mainly made of Chinese porcelain, field surveys were conducted in China's Inner Mongolia, Jiangsu Province, Henan Province, Guangdong Province, and also in Hong Kong, South Korea and Taiwan's Penghu Island. In Japan, many sites such as Amagasaki, Amami, Hiraizumi, Nagasaki, Fukuoka and Kyoto were included in the survey.
　Based on these field surveys, I presented research on ceramics written in ink at academic conferences in Japan and overseas, and published 6 academic papers related to this research during this research period.Regarding the database, "Nanhai I" was created and "Compilation of ceramics written by ink excavated in China" was published."In addition, a database of ceramics written by ink found in "Nanhai I" was created and "A compilation of ceramics written by ink excavated in China" was published.

研究分野：中国史

キーワード：墨書陶磁器　綱首　綱　花押　貿易陶磁

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

中国での歴史時期考古学の発展に伴い、墨書文字のある陶磁器は実は相次いで発見されている。歴史研究においては考古学資料、とりわけ出土文字資料の利用はもはや常識だが、墨書陶磁器を歴史研究に活用することは出土地の中国国内においても未だ行われていない。宋代墨書陶磁器は日本博多でも発見され、東アジア交易史の重要資料とされている。中国福建省福州出土の墨書陶磁器と博多出土のものが類似することの指摘はあるが、それ以外の地域から出土した墨書陶磁器との比較研究は研究開始時には存在しなかった。

本研究開始以前に、本研究代表者は研究開始当初、既に中国江蘇省南京、常州、浙江省杭州、寧波、福建省福州、福清では現地での墨書陶磁器実見調査を実施済みであり、また文献調査等から内蒙古燕家集、山西省大同、陝西省西安、河南省洛陽、江蘇省鎮江、福建省泉州、更に水中考古学の成果において墨書陶磁器が存在することを確認していた。時期は宋代（10 世紀～13 世紀頃）が中心だが、中国南朝の都で、現在の南京にあたる建康城では三国呉（3 世紀頃）にも墨書陶磁器が出土している。南京に隣接する江蘇省常州からは唐代の墨書陶磁器があり、内蒙古燕家集では元末から明初（14 世紀頃）の墨書陶磁器が存在する。墨書陶磁器出土地は各地の都市遺跡、寺跡、交易関係地であり、更に水中考古学による沈船からの出土も報告されている。都市、寺、交易地と沈船はそれぞれ生活、宗教、貿易に深く結びついたものであり、商品として陶磁器が流通を始める 3 世紀から中国南部を中心に海のシルクロードが形成され隆盛期を迎える 13 世紀、さらにそれ以降にも繋がる資料でもある。また博多遺跡群の事例で知られているように、中国以外にも日本、韓国でも墨書陶磁器は出土している。

これらの資料の多くは一つの陶磁器に数文字程度の文字情報だが、墨書陶磁器は時間的にも空間的にも広く存在し、かつ用いられた当時の生活、宗教、交易等の実態を反映する資料である。これらの墨書陶磁器の資料集成を実施し、データベース化による分析から、それぞれの性質を分類し、文字の持つ意味を明確にすることで、史料として活用する方法が検討可能であることを予想し、本研究を開始した。

２．研究の目的

墨書陶磁器はそれが使用された時代に書かれた一次史料であるが、これを史料として活用するという発想を持つ研究は今までになかったものである。墨書陶磁器の墨書文字には十分な史料性があり、陶磁器をめぐる生活の実態や日中貿易を含む交易を解明する上で不可欠の史料とすべきものである。本研究は歴史学においても史料学においても新たな分野を開拓することを目的とした。

史料として利用するには墨書陶磁器資料を分類系統化する必要がある。中国では近年水中考古学が驚異的なスピードで発展しているが、その成果は日本を含む広域アジアでの様々な交流を示すものとして理解されなければならず、交易品の主軸をなす陶磁器への墨書は重要な情報源となるものである。また宋代を中心に中国では寺遺跡から墨書陶磁器が多く出土している。日宋交流を主に担ったのは僧侶であり、日宋貿易の中心的交易品は陶磁器である。本研究では墨書陶磁器の分類と分析から墨書資料を史料化することで、東アジア各地の交流の実態についても解明が可能となる。

墨書陶磁器は陶磁器交易に関わる地域を中心に、生活、交易、宗教に関わる遺跡から出土している。これが史料化されることは陶磁器流通の時間的変化、社会構造の変化にも新たな視点をもたらす。また貿易陶磁をめぐる交易拠点や集団についてもその実態解明に大きな意義を持つものである。

出土した墨書陶磁器と遺跡の関係を見ると①都市遺跡における生活区域、②交易に関わる場、③寺跡もしくは都市の門跡などの機関、の三つに大きく分類できる。①はゴミ処理に使われた河川、井戸等の跡から所持者の姓、店名等の他、日時、価格等の墨書も見られる。②は港湾遺跡、沈船の他、交易機能を持つ都市遺跡も含まれる。交易関係者の姓、綱司を表す「綱」のように交易にかかわる組織の墨書がある。③は寺名や「常住」のような寺の役職、門跡の場合には門名など、墨書により遺跡の名称が比定可能である。本研究では墨書陶磁器のこの三つの分類の基準を明確にすることでデータベース化を行うことを具体的な目的とする。

墨書陶磁器は三世紀三国呉時期に始まり、南宋時期が最盛期であり、十四世紀明初のものも確認されている。この時間的展開状況と特徴を明らかにすることも本研究の目的であり、これは陶磁器底部外側への墨書が長期継続されてきた理由を理解するだけなく、古代から中古社会への変化、唐宋変革等社会の構造的変革にも関わる問題提起を可能とするものである。

３．研究の方法

本研究開始時に、存在を確認していた中国墨書陶磁器では江蘇省南京建業・建康城の三国呉（3 世紀）のものが最古であった。南朝から唐代前半（6～8 世紀）の事例は報告された数

は少ないが、南京に近接する常州、唐都長安のあった陝西省西安に見える。宋代（10～13 世紀）になると中国各地に存在が確認でき、陶磁器の生産と消費の中心となっている浙江省杭州や福建省福州、福建省福清の少林寺遺跡、元代以降では内蒙古燕家梁遺址等で墨書陶磁器の出土がある。このような墨書陶磁器出土のある遺跡の報告書を収集し、それぞれの遺跡の特徴や出土状況から墨書資料への分類基準を設け、それによる資料の分類作業を行う。博多遺跡に代表される日本墨書陶磁器資料も全国的に収集を行い、中国で出土した墨書陶磁器の分類基準によって分類を試みる。そのための具体的な方法として、現地調査とデータベース作成を実施する。

現地調査については元末から明初の墨書陶磁器が出土し、内陸における交易拠点と考えられている内蒙古自治区包頭市燕家梁遺跡、日本国内での墨書陶磁器資料の実態を把握するため福岡・博多遺跡群等の現地調査は研究開始時より予定していたものである。研究開始後、韓国における墨書土器の調査が可能となり、韓国慶州での調査も実施した。また墨書内容のうち「綱」字に注目し、日本国内外において「綱」字墨書陶磁器及び関連史料の調査も実施することとした。さらに、香港中文大学資料館や台湾澎湖島についても交渉により資料の実見調査が可能となった。

「綱」字の他、墨書陶磁器の墨書に多数見られる「花押」については、古印研究の成果が応用できることを発見し、本研究において墨書陶磁器における「花押」と中国唐宋印における「花押」の比較も実施することとした。

文献史料上に「墨書陶磁器」に関連する記載はない。しかし墨書陶磁器に見える「綱」字は貿易商人の中心的人物を指す「綱首」に関わるものであることが指摘されている。文献史料において「綱」および「綱首」の事例を収集することから、墨書陶磁器の「綱」の示すものが明確になる。本研究ではこの方法も用いて文献収集も実施した。その結果、「綱首」の記載を持つ石碑や羅漢像の存在も判明した。

これら現地調査に基づく資料収集、および文献史料の検討による新知見を学術成果として報告するとともに、墨書陶磁器のデータベース化も本研究の目的である。データベースについては明治大学日本古代学研究所ホームページから発信するとともに、他地域との比較対象として特に重要と考えた中国内の墨書陶磁器については、冊子体による報告書の刊行も行った。これによって分類基準の妥当性を検証するとともに、中国墨書陶磁器の総合的解析が可能となった。

４．研究成果

現地調査

2017 年 8 月に中国内蒙古自治区集寧路遺跡及び燕家梁遺跡出土墨書陶磁器資料実見調査、北京故宮博物院、内蒙古博物院、内蒙古考古研究所等の研究者との学術情報交換を行った。同年 9 月には韓国において慶州国立中央博物館及び慶州新羅王宮遺跡にて墨書陶磁器及び墨書土器資料調査、高麗大学、国立慶州博物館等の研究者との学術情報交換を実施し、また同月には尼崎市埋蔵文化財センターにて大物遺跡出土の「綱」字墨書陶磁器実見調査も実施した。同年 12 月には台湾澎湖島出土の「綱」字墨書陶磁器等の資料実見調査を行い、現地研究者との学術情報交換も実施した。

2018 年 1 月～2 月には新発見の江蘇省蘇州太倉樊村涇遺跡出土陶磁器資料実見調査及び如東県国清寺遺跡出土の墨書陶磁器を実見した。同年 3 月には奄美諸島与路島出土の「綱」字資料を現地にて実見調査した。同年 7 月には岩手県平泉町で「綱」字墨書の可能性を持つ志羅山遺跡出土墨書陶磁器の熟覧調査を実施、同年 8 月には長崎県東彼杵町で白井川遺跡出土の「綱」字墨書陶磁器及び貿易陶磁の熟覧調査を実施した。同年 9 月、中国洛陽唐宋洛陽城と白居易故居、・西安唐長安城西市・東市遺跡で出土した墨書陶磁器を熟覧調査した。同年 12 月には福岡市にて墨書陶磁器を発掘中の遺跡を見学し、同月、熊本市より「綱司」字墨書陶磁器が存在するという情報から熊本市二本木遺跡出土「綱司」墨書陶磁器、また天草市内出土の墨書陶磁器の熟覧調査を実施した。

2019 年 2 月には香港中文大学資料館所蔵の「綱」字墨書陶磁器の存在が確認しその熟覧調査、また広東省韶関市南華寺蔵の羅漢像に「広州綱首」銘のあることが確認できたため、その現地調査、さらに広州市内遺跡出土の墨書陶磁器の熟覧調査を実施し、広州市にも「綱」字墨書陶磁器のあることを確認した。同年 3 月には壱岐島出土の墨書陶磁器を熟覧調査した。同年 7 月には福岡大学桃﨑祐輔教授の研究協力を得て、福岡訪問中の中国・寧波大学李広志教授と綱首関連史跡や発掘中の博多遺跡群 221 次調査地等の現地調査を実施し、「綱首」関連資料を実見した。同年 8 月には中国甘粛省博物館等で墨書陶磁器に関連して注目する経筒の起源に関わる仏塔を実見した。また平安京左京七条二坊十一町（東市外町)の発掘で「丁綱」の墨書陶磁器が出土していることという情報を得て、同年 9 月に発掘者である龍谷大学を訪問し、資料の実見調査を実施した。同年 12 月には広東省海のシルクロード博物館を見学し、「南海Ｉ号」の発掘状況と最新の出土物を実見した。2020 年 2 月には福岡の出張に同行した李広志教授より寧波での墨書陶磁器が出土した状況について教示を得て調査を予定し、現地の状況の確認と日程調整まですすめていたが、新型コロナウイルスの流行により中止となった。

研究発表

2017 年 10 月に浙江省杭州にて西泠印社国際印学峰会に参加し、中国語により「墨書陶瓷上的花押和宋元花押印（墨書陶磁器における花押と宋元花押印）」を報告し、同学会三等賞を受賞した。本報告内容は 2018 年に同学会論文集に学術論文として掲載された。同年 12 月には寧波大学にて寧波大学外国語学院日本研究所主催「寧波与日本文化交流史」シンポジウムに参加し、中国語により「墨書陶瓷和寧波（墨書陶磁器と寧波）」を報告し、本報告内容は 2018 年に寧波市文化局発行の雑誌『天一文苑』に論文として掲載された。

2018 年 6 月、台湾玄奘大学で実施された南島史学会にて「墨書陶磁器からみた「綱」」の題目で報告を行った。本報告は 2018 年 11 月に『南島史学』において学術論文として刊行された。同年 7 月には東北大学で実施された「平泉研究会」及び第 2 回「経塚研究会」にて「広東省南華寺五百羅漢銘文―「広州綱首」をめぐって―」の題目で報告を行った。本報告は 2019 年 3 月に『岩手大学平泉センター年報』において学術論文として刊行された。また同年 3 月にはこれまで集成した墨書陶磁器資料について「「墨書陶磁器」とその史料化」として『明大アジア史論集』23 号に発表した。

2019 年 6 月 28 日に（財）東洋文庫で実施された第 48 回南島史学会大会にて「「南海Ⅰ号」搭載墨書陶磁器について」の題目で研究発表を行い、その内容を『南島史学』第 87 号で学術論文として公表した。同年 8 月、北京にて中国社会科学院・明治大学による日中学術シンポジウム「紀元前 3 世紀から 10 世紀の東アジア地区における考古と歴史学研究」に参加し、「綱と綱首―文献史料からみた墨書陶磁器」として学術報告を実施した。同年 12 月には中国広州の中山大学からの招聘により「墨書陶磁器と綱」として中山大学歴史系で講座を実施した。

2020 年 3 月により台湾・国立海洋大学で実施予定の 4th Asia-Pacific Conference on Underwater Cultural Heritage にエントリーし、報告論文は受理されていたが、新型コロナウイルスの影響により学会延期となった。

データベース作成

2018 年度に墨書陶磁器の出土報告のある中国広東省の沈没船「南海Ⅰ号」の報告書が刊行され、この内容を元に「南海Ⅰ号」墨書陶磁器データベースの作成に着手し、2020 年 3 月に明治大学日本古代学研究所ホームページにて公開した。

また 2020 年 3 月にこれまでに現地調査を実施した唐宋洛陽城出土墨書陶磁器、内蒙古燕家梁遺跡出土墨書陶磁器、南海Ⅰ号墨書陶磁器に加え、すでにデータベースを作成している六朝建康城出土墨書陶磁器について、研究成果報告書として冊子による『中国出土墨書陶磁器集成』を刊行した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 石黒ひさ子	４．巻 47
２．論文標題 「南海Ⅰ号」搭載墨書陶磁器について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 南島史学	６．最初と最後の頁 246－224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石黒ひさ子	４．巻 23
２．論文標題 中日交流史上的墨書陶瓷与寧波	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『天一文苑』	６．最初と最後の頁 72－78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石黒ひさ子	４．巻 86
２．論文標題 墨書陶磁器からみた「綱」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 南島史学	６．最初と最後の頁 203-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石黒ひさ子	４．巻 23
２．論文標題 「墨書陶磁器」とその史料化	５．発行年 2019年
３．雑誌名 明大アジア史論集	６．最初と最後の頁 148-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石黒ひさ子	4．巻 7
2．論文標題 経筒にみえる宋人銘墨書と「綱首」ー広東省南華寺出土五百羅漢銘文「広州綱首」をめぐってー	5．発行年 2019年
3．雑誌名 岩手大学平泉研究センター年報	6．最初と最後の頁 29-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石黒ひさ子	4．巻 87
2．論文標題 「南海Ｉ号」搭載墨書陶磁器について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 南島史学	6．最初と最後の頁 246－224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　1件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 石黒ひさ子
2．発表標題 「広東省南華寺五百羅漢銘文―「広州綱首」をめぐってー」
3．学会等名 「平泉研究会」/ 第2回「経塚研究会」　2018年7月22日（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 石黒ひさ子
2．発表標題 「墨書陶磁器からみた「綱」
3．学会等名 第47回南島史学会大会　2018年6月29日
4．発表年 2018年

１．発表者名 石黒ひさ子
２．発表標題 墨書陶瓷上的花押和宋元花押印
３．学会等名 第五届西レイ印社国際印学峰会（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 石黒ひさ子
２．発表標題 墨書陶瓷和寧波
３．学会等名 寧波与日本文化交流史検討会（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 石黒ひさ子
２．発表標題 「南海Ｉ号」搭載墨書陶磁器について
３．学会等名 第48回南島史学会大会　2019年6月28日（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石黒ひさ子
２．発表標題 綱と綱首－文献史料からみた墨書陶磁器
３．学会等名 中日学術論壇 公元前3世紀至10世紀東亜地区考古和歴史学研究（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 石黒ひさ子	４．発行年 2020年
２．出版社 研究成果報告書	５．総ページ数 294
３．書名 中国出土墨書陶磁器集成（六朝建康城・隋唐洛陽城・包頭燕家梁遺跡・南海Ｉ号）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

南海I号データベース
https://www.isc.meiji.ac.jp/~meikodai/obj_bokusho.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考